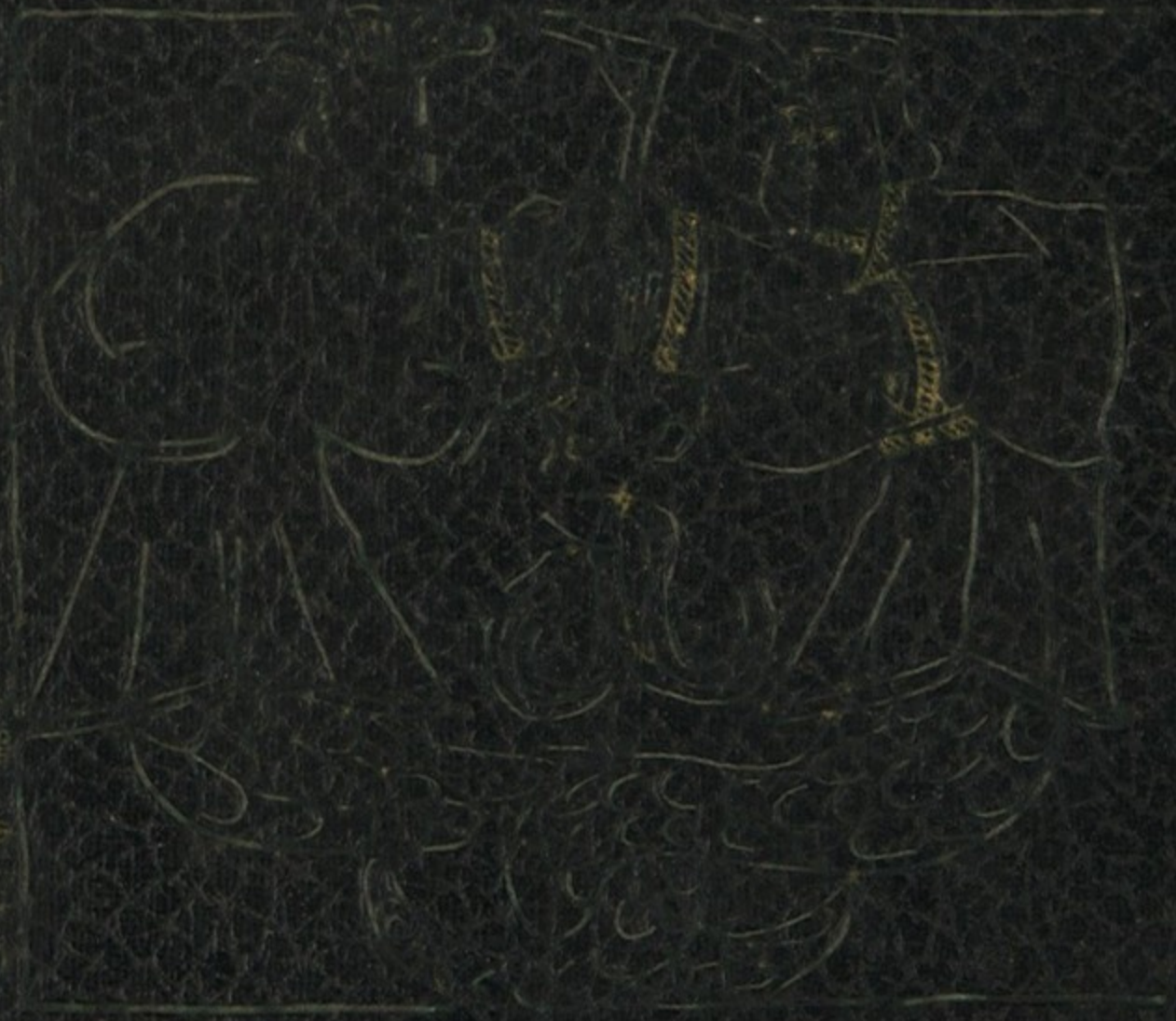




THE UNIVERSITY OF CHICAGO



UNIVERSITY OF CHICAGO LIBRARY

XI
1

大正十五年八月

亞東印畫目次

(大正十五年八月現在)

大連港口客上陸 (大連)
定期船客上陸 (大連)
蒙古の美人 (蒙古)
道古の沙丘 (蒙古)
無量觀音 (奉天)
北陵 (奉天)
奉天街通り (奉天)
新萬物相街通り (奉天)
美しき庫底の港 (奉天)

第壹回

農事試験場の放牧 (公主嶺)
支那老入の乗物の集合 (安東)
奉天驛頭の乗物の集合 (奉天)
大廣場の朝 (大連)
戎の牧場 (大連)
牛糞の貯蔵 (大連)
蒙古包の裝飾 (大連)
井古戸の裝飾 (大連)

第貳回

九龍淵の頂より見た彩霞 (金剛山)
玉龍山の頂より見た彩霞 (金剛山)
高峰の雄姿 (金剛山)
高梁の脱穀 (金剛山)
高梁の祭典 (金剛山)
娘の苦力部 (大連)
大連小崗子 (大連)
大連小崗子の部 (大連)

第參回

大連市場の夏 (大連)
沙漠の日出 (大連)
オホソボの泉寺 (大連)
水龍の収穫 (大連)
満洲の挽馬 (大連)
石白の挽馬 (大連)
赤い挽馬 (大連)
哈爾濱市街 (大連)

第肆回

冬山の一角 (支那)
冬山の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)
苦力部の一角 (支那)

第伍回

興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)

第陸回

興安嶺森林中の牧牛 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)
興安嶺の森林 (北)

第柒回

砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)
砂丘の骸骨 (蒙古)

第捌回

烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)
烏瞰の萬里の長城 (山海關)

第玖回

蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)
蒙古包 (蒙古)

第拾回

牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)
牡丹臺の展望 (朝鮮)

第拾壹回

興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)

第拾貳回

興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)
興安嶺の白樺 (北)

第拾參回

釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)
釣魚臺 (湯崗子)

第拾肆回

香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)
香山の古塔 (北京)

第拾伍回

義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)
義和團 (北京)

第拾陸回

大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)
大連 (大連)

第拾柒回

興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)
興安嶺の樵業 (北)

第拾捌回



● 大連港口 (大連)

大連港は延長一萬三千餘尺の防波堤を以て東西北三方を圍み、港内九十四萬坪の海面に三本のピアが出て居る、その延長一萬二千六百三十尺、一時に十五萬噸の汽船が繫留され、年額約四百五十萬噸の貨物を吞吐する。滿蒙の支關たるに恥づかしくない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 定期船々客上陸 (大連)

内地からの定期船が到着して、乗客の上陸する光景である。左側に見ゆる建物は乗船客の待合室で、内外の設備装飾、共に東洋に其の比を見ざる立派なもので乗降客はベランダより突出してある加働式乗降梯によつて乗降する。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 蒙古の沙丘 (蒙古)

汽車に別れてから幾日の旅経、蒲鋒馬車に委せた體
と魂とは、蒙古の原始生活を憶れて此の方大興安嶺へ
と急ぐ。開魯から札魯特旗領への途中茫茫たる黃砂の
平原にさながらの巨濤の如く蜒蜿として隆起して居る
ものは所謂砂丘である。七月の太陽は赫灼として地の
底にまで照りつけて居る、熱砂は百何度の高温を示し
蠟燭は熔け燐寸は自然發火をするといふ状態、人も正
に昏倒せんとする中を路案内の蒙古人は騎馬で此の焦
熱地帯を悠々突破する。
(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 蒙古美人（蒙古）

某王の内室で、潤額豊頬の間に眉目の愛くるしさを湛へたる正に母性の典型的表情を有して居る。頭髮、服装共に滿蒙婦人の風俗であるが、爰に漢、蒙兩種族の服装の相異は、漢族の女性はスカートを用ゐるに不拘、滿蒙婦人は男子と同一の大掛兒タグコルを着し決して袴を穿かない所に特徴がある。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 放 牧 (蒙古)

蒙古人の生活は牧畜を基本とする、彼等が人生に於て天地間唯一の伴侶はその家畜である。彼等が日常の挨拶にも先づ以て家畜の近況、牧草の有無を尋ねてから後用談に移るのが禮だ。而して彼等の最も怖るゝものは旱魃と大雪である。旱魃は水脈を絶ち、大雪は牧草を雪中深く埋め隠して了ふ。それがため家畜は飢え甚だしき時はその大半を凍死せしめることがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 牛糞の貯藏 (蒙古)

蒙古人の牛糞の利用は之れを燃料とするばかりでなく往々塗料にも用ゐる。囤積したる此牛糞は彼等が冬季を経過するためには如何に貴重な燃料であるか想像の外である。蓋し蒙古人は草を刈る勞を牛を以て代用せしめ、牛がその榮養を生草に依つて受け、而して排泄したその不用物は燃料として利用するといふ自然と人間の生活に於ける交互作用が少しの無駄もなしに遺憾なく實現されて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 蒙古包の裝飾（蒙古）

某王府の蒙古包の外観を黄、鰐茶、黒などの毛氈を以て被覆して裝飾をした光景だ。之れは主に冠婚葬祭の儀式をする場合に行はれ内部には王座もあり、卓子其他の調度などそれ／＼に立派なものが用ゐられてゐる。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 井

戸（蒙古）

蒙古の井戸は生ける凡在ゆるものゝ生命である。偶然に見出されたる一涪の水源は何百年の昔から地下の水脈に依つて搬ばれた此の無水の世界への唯一の天恵であらねばならぬ。何處よりか持ち來たされけん一本の楡の巨材をくり抜いた水槽は牛馬羊の幾千と數へらるゝ家畜のために飲料水を供給されるものである。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆駱

駝

(風俗)

荒れ野路、胡砂吹く風に送られて、さして行方は白音太拉、駱駝鈴に日は暮れて、冷たき夢の蒙古旅。

(種板番號 八三)



◆メーリン廟喇嘛の塔 (蒙古)

開魯から一日半行程にしてメーリン廟の喇嘛部落につく、此の喇嘛廟は内蒙中にも有数なもので外観結構共に壯觀である。廟前門内にある二基の喇嘛塔はその彫刻布彩裝飾の表現に於て頗る異觀を呈して居る。恐らく西藏直線のものであらう、五輪の頂上にある桃型の裝飾は日月を象徴したものだ。

(種板番號 三六七)



◆ 沙漠の日の出 (蒙古)

蒙古包の中に暫し假寝の夢さめた旅人達は、地上未だ夜の影の匍ふ間に、またしても沙漠の旅途を急ぐ。看よ、東方漢々たる沙原のかなた、黎明の空は芙蓉色に染め出されて日の出を待つ沙漠の空氣はプリズムの如く清い。

(種板番號 三五八)



●

オ

ボ

(蒙古)

蒙古族にはそれ／＼の旗を呼稱する各蒙古王族、屬領地がある。その境界を劃する標基をオボと稱して居る。

駱駝の瘤をオボのコントラストが面白い。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 茂林廟本堂（蒙古）

境内一千の喇嘛僧を收容して居る。本廟の規模は頗る
宏壯なものである。活佛を中心に昔は随分修道堅固にや
つて居たものだが、近頃は風紀が頗る亂れて居るとの噂
だ。

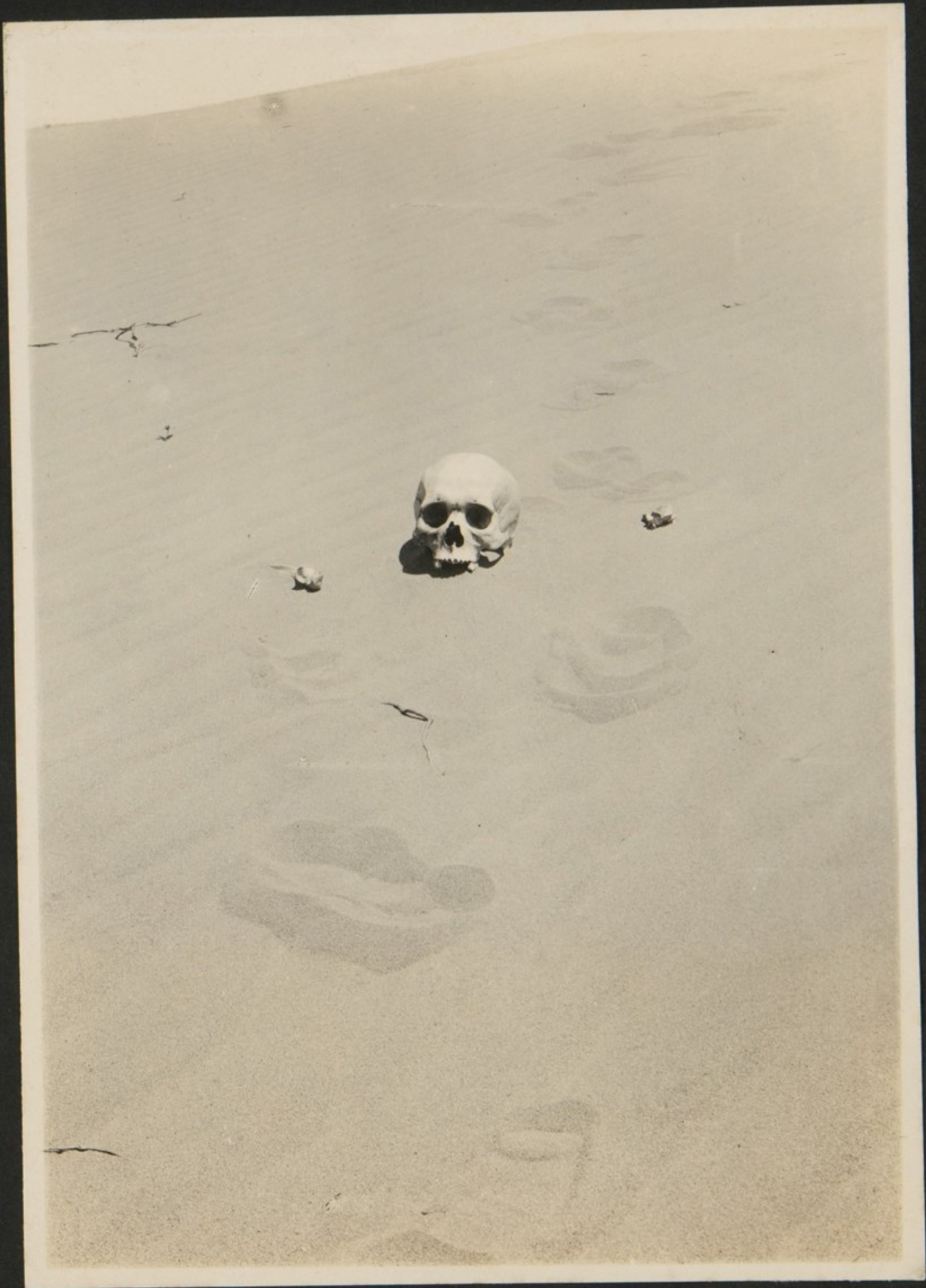
（印畫の複製を嚴禁す）



◆蒙古牛車（蒙古）

日本人には廣いといふ感じは海を見た時にのみ其最大限を意識する。然るに蒙古の平原に於て見る廣茫たる景色は眞に驚嘆すべきものがある。日は原から出でて原に入り、四方に擴がつた地平線内には一物の遮るものがない。アノ草原に轍の跡を印し索り行く牛車は何處の部落をさすのであらう。

（印畫の複製を嚴禁す）



◎ 砂丘の髑髏 (蒙古)

蒙古人の葬式には大體三様の風習がある。富者の階級に屬するものは火葬にして其骨を粉碎し麥粉と共に練り固めて之を靈場に納祭す、漢人の俗を模倣したものは屍を棺に納めて埋葬する、それから一般平民の間に行はるるものは屍を山頂又は谷底に運んで狼鷲の類の咬啄に委する風習がある、若し山野に放置したる屍にして三日を経ても尙野獸の咬啄なき時は喇嘛僧を招じて讀經追弔をするさうだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 駱 駝 隊

陸上の船といはるる駱駝は蒙古でも矢張りその大曠
原を旅行する時の船として重寶がられて居る、白音太
來郊外暮れか、つた雪の日に、あのトロントロンと鳴
る頸の鈴音が聞けた時、何んとも言へない蒙古情緒に
浸される

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 劍 の 舞 (朝鮮)

妓生は朝鮮の歴史を語る花である。もと李朝時代官妓として養成されその幽艶にして古雅なる處は今尙市井の間にも残されてゐる。そして平壤には妓生學校のある事は人も知る所寫眞は京城朝鮮ホテルの後庭に於ける官妓の劍の舞である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆朝鮮の婦人（風俗）

頹廢の美、それは朝鮮婦人から感受する一つの印象だ。
薄萌黄か或は水色がかつた裾長の裳を穿いて上半身白衣
に包んだ彼の女の装では、それ自身既にセンチメンタル
な感じである。顔の弛んだ筋肉に漂ふ微笑はむしろ凄艶
ではないか。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 道

士（風俗）

千山寺觀の一として普安觀がある。道士の修する處で樹梢に古鐘を懸垂して山嵐に響を傳ふる所など全く一部の活畫である。道教は老子を祖述し神仙を加へて説明したもので結髪した頭上に道帽を冠り寬袍を纏ふて居る。霞を食し風を御して悠々自適自然生活をして居る。

（印畫の複製を嚴禁す）



● 無量觀 (千山)

千山は遼東第一の仙寰である。巨巖奇峯老松の間に連立してその景色雄大なる處寺觀の見るべきものが多い。その中無量觀は最も名高い。明の徐文華の詩に

雲煙廻合水潺湲。

路轉陂陀百折還。

上界鐘聲霄漢杳。

前山塔影夕陽間。

松濤漲壑千巖響。

花雨浮空滿地斑。

座久虛堂疑誤人。

恍然身出世人寰。

好く千山の景趣を寫し得て妙である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 新萬物相 (其一)

天下の絶景として賣出してゐる金剛山一萬二千衆峯
中で然も金剛山を代表する景は萬物相だ、殊に新萬物
相の景は正に天下一品。人間の發明した言葉や、寫眞
では此の大自然の藝術は到底現はし得ない。金剛第一
關と謂ふ石門を潜り辛うじて覗く、脚下幾千丈とも知
れず鋭く削立してゐる力強い男性的の景だ。路の餘り
に險岨なため舊萬物相丈で大抵の人は引返すが、新
萬物相を見ずに金剛山を語る資格はないのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆美しい庫底の港（金剛山）

白砂長汀—それは美しい海岸を表す爲には附きもの、言葉だが、往々いかもの、白砂長汀がある、然し我が庫底海濱のそれは本當に純白だ。松の翠、碧玉の如く澄んだ日本海、年が年中洗ひに洗はれた眞砂には垢一つない。純な景色だ。附近の藁屋根も四圍の景と調和して、えも云はれない美しい景色となつて眼底に入つて来る。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 玉女峰山頂より見た彩霞峰の雄姿

(金剛山)

奥萬物相の一部と観音連峯及び彩霞峯に雄姿を望遠レンズによつて寫し出したものだ濃霧の推移につれて刻々變化して行く彩霞峯の雄姿は—嗚呼—何たる崇高な景であらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆高粱の刈入 (風俗)

旅順に鶉の群が北風と共に飛んで来る頃にはソロ／＼高粱の收穫が始まる。そして今迄青かつた畦が次々と一望赫土の平原に立ち戻つて行く。

(種板番號 一三七)



◆ 高粱の脱穀（風俗）

十月高粱が刈穫されると農家の前庭に堆高く高粱の囤が出来ると。而して農村には大抵共同作業場があつて其處で毎日脱穀が始まる。驢馬は最も忠實なる農家の共勞者だ。

（印畫の複製を嚴禁す）



● 千山龍泉寺 (千山)

千山の寺廟中一番大きいものは龍泉寺と云ふ。寫眞は同寺の全景である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 水稻の收穫 (風俗)

滿洲にも近頃水田が出来て立派な米が穫れるやうになつた。最初支那人は水田を作る事を知らなかつたが此の頃では盛んに耕作をやり出した。滿洲米の産額は昨今約七十萬石と謂はれて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 満洲の娘 (風俗)

娘十七八戀知る頃は美しい。前髪を厚く切下げて額を深くかくした下には、柔かい二つの瞳は何ものかの幻影を追ふて輝いて居る。水色の大掛兒の下に鶉色の褲子を穿いた彼の女の姿は、曠野に見出さるゝ一つの自然美であらねばならぬ。

(種板番號 三八六)



◎ 石臼を挽く驢馬 (風俗)

支那の農家では家畜を色々な動力として利用することはない。巧みである。驢馬が口も眼も全く隠されて石臼の廻りを四六時中神妙に勞役に服して居るのは如何にも可憐である。農婦はあの小さい足を、チヨコくさせつつ驢馬を馭し乍ら高粱や蕎麥の粉を挽かせて居るのも美しいコントラストだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 夏冬の千山

夏の千山は十分に紹介されてゐるが、冬の千山は未だ神秘の仙境として氷雪の下に睡つてゐた。此の寫眞は千山三難險の一として知られてゐる羅漢洞から見た景色で豪宕清明の氣、山嶺は容易に俗人を近寄らしめない感がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 冬の千山

千山の春、夏、秋、共にそれ々の趣きはあるが、雪に飾られた冬の千山の景とは比すべくもない。紺碧の空、無限に連なる白妙の遠山、魔の如に聳えてゐる暗黒色の巨峯、此の崇高無比な景に當面した自分は今更に造化の作る偉大な藝術に驚歎する他はなかつた。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 興安嶺の落葉松 (北滿)

零下四十度の寒さ、シヤッターはもう利かない、雪は銀粉の如く大氣の中にもちら〜と降る中を、脚を没する積雪を踏みつけて登った、山中の樹上に體を括りつけて撮したのは此寫真だ、お蔭で右手の指四本はトゥ〜凍傷にかゝつて了つた。

(印畫の複製はお斷りします)



◆ 雪中の樵作業 (北滿)

酷寒の四十七度の興安嶺森林中は壯嚴なる霜の花によつて飾られてゐる、此の山中に伐木作業をする光景を見たものでなくては労働の眞の尊きは解らないのである。ペーチカの前に寝コロロンで居る都會人の到底想像もつかない世界なのだ。

(印畫の複製はお断りします)



◆ 興安嶺の樵夫 (北滿)

頭からツマ先迄毛皮を以て装身した樵夫達の服装は鳥渡遠目には人か獸か判然しない、鼻下の髯に呼氣が凍結して霜花をつけて居るのも奇觀だ、丸太小屋の光景も此人達には好い對象である。

(印畫の複製はお斷りします)



◆牛肉の斧割（北満）

牛肉の片塊は凍結して全く石塊の如く堅い、大なるものは鋸で挽きそれを俎上斧を以て割つて之れを煮るのである。零下四十七度の寒さを體驗しないものには全く想像もつかない現象である。

（印畫の複製はお断りします）



◆ 松花江の結氷 (北滿)

冬季哈爾濱の氣温は零下三十度から三十四五度位に下降する、哈爾濱の生命とでも謂ふ松花江は、十一月から翌年四月迄全く結氷に封ぜられて一大氷原が出現し、兩岸の交通は陸上と異ならざる聯絡を保つに至るのである。

(印畫の複製はお断りします)



◆ 松花江上のサーニ (北滿)

驢馬に牽かせたサーニがチリン／＼と鈴を鳴らして銀盤のやうな氷上を滑つて行く、自動車は怪物のやうな警笛を鳴らして自然のトラックを走驅する、今迄河一筋に依つて隔てられた兩岸には冬に應はしいローマンスが取り交付されるのであらう。

(印畫の複製はお断りします)



◆ 大連港の凍結

大連の冬は十一月頃胡砂吹く風と共に先づ陸から来る、陸上の山も家も人も全く冬籠つて了つても海は未だ蕩漾として青い水を湛えて冬の巨人と對抗して居るかに見えた。さうして居る間に一度遽然として零下十幾度といふ大寒が來襲すると海上は一夜にして全面靑玻璃に敷きつめられる。而して凍つた此處彼處にもやつてゐた船は大銀盤上に配せられて美しい世界を展開する。

(印畫の複製はお斷りします)



◆ 南支那の戎克 (大連)

戎克は如何にも古典的な船である、古い支那そのもの、
如く。戦争と戀と貿易とを載せて、蝙蝠の羽のやうにアノ
褐色の帆を揚げた姿を見るものは、マドロスの傳説の中に
見出す怪異を思ひ起させるであらう。

殊に南方から來る戎克には船體の舳艫部を極彩色に装
飾した美しいものがある、北方の港大連の海上に凍結した
處は南方の美娘を生捕つた形である。

(印畫の複製はお断りします)



◆ 木の都吉林

松花江上流で伐り出された巨木は、筏として流され、吉林の碼頭に集る、かくして吉林は正に木の都である。氷雪に埋れた江山の畔りにある町は淋しい。

(印畫の複製はお断りします)



◆ 氷上の帆掛櫓（營口）

結氷に封ぜられた遼河の奇観は此の帆掛櫓だ、氷上のヨットとして冬の行樂に或は運搬に用ゐられて居る。

（印畫の複製はお断りします）



◆ 興安嶺森林中の牧牛

放牧された牛群は海拔四千尺の興安嶺山林中酷寒にさらされて平氣に生棲してをる。此處の氣溫のレコードは零下四十七度ださうだ。

複寫を御斷り致します



◆ 興安嶺の森林

興安嶺森林の伐採事業を經營して居るものに札免公司がある、其區域は約四國大の廣袤を包有してをるに依つてもほゞその事業を察することが出来る。此寫眞は落葉松林相の一部である。

複寫を御斷り致します



◆ 酷寒中の杣作業

札免会社の作業場には山から伐出した木材をスレツパーに製材して居る、労働者の耐寒には實に驚異に値するものがある。

複寫を御斷り致します



◆ 穴居生活

地下數丈の穴を掘穿してそれに屋根をさしかけた上に土をかけて小山のやうにうづ高くする。之の上層に見ゆる小屋は空氣抜て土中から突立て居るのが煙突だ地下幾箇の室に分れて頗る保温には適した住居だ。

複寫を御斷り致します



◆ 雪の興安嶺

興安嶺は北滿森林中の最も大なるものである、此寫眞は大興安嶺の分水嶺海拔四千尺の一地點で、西北は湖北萬里の蒙古沙漠に連る。雪の興安嶺連峯である。

複寫を御斷り致します



◆ 札幌公司のスレツパー置場

四國大の廣袤を有する森林地帯から
伐出さるゝ木材の量は實に無限である
東支鐵道、滿鐵用のスレツパーは皆此處
から供給される。

複寫を御斷り致します



◆アイスホッケー

冬の戶外競戯の中あくまでも男性的の爽快さを覺へしむものはスケートである。そらしたスケート競戯の中のアイスホッケーは最近漸く上下人士の口の上つるやうになつたが、寫眞は哈爾濱に於けるそれである。

複寫を御斷り致します



◆ 橇遊び (ハルビン)

坂道の如く勾配をつけたブリツチに
路を作つて頂上から橇を滑らして遊
。頗る痛快にして冬の遊びとしては
一のものだ。

複寫を御斷り致します



◆ 海 凍 る (大連)

不凍港と銘打った大連も稀れに凍る事がある。潮の満干と無心の風の戯れから氷塊は宛として南北兩極を髣髴たらしむる壯觀を呈し限りなく美しい。

複寫を御斷り致します



◆ 氷上の荷役 (大連)

朔風日に凜烈さを加へて行くに連れて、奥地特産の出廻りを誘發し、大連埠頭出入の船舶も次第に繁きを加へる頃、時として滞泊船を氷で閉ざすことがある。そして平常ならば水深幾十尺の氷上に荷車利用の荷役が開始される。寫眞は濱町沖の荷役作業の光景である。

複寫を御斷り致します



◆ 街頭のエピソード (北滿)

街の踏切りを越して追ひかけて来たロスの青物屋のド
ピンスキイが、支那人の百姓を呼びかけてまたしても野
菜の値段を値切つて居る。海拉爾は東支線中に於ける非
常に豊富な野菜の生産地である。

(印書の複製を嚴禁す)



◆ 郊外の平和郷（北滿）

哈爾濱に行つた氣まぐれに、あの地の近郊をカメラをかついで徘徊したその折、郊外の田園にセツトルした波蘭人の一家庭を見出した。歐洲戦争の際戦禍を蒙つて子供が日本に救済されたといふ経験の持主であつたので、圖らずも晝飯の御馳走に預かつた。何時の頃から來住したのか聞きもしなかつたが牛を飼ひ鶏を養つて卵や肉や野菜には事缺かぬ貧しいと雖平和な日を過して居る。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 苦力部落の一角 (支那風俗)

苦力が毎年春先山東から海を渡つて滿洲にやつて來る數は大連ばかりでも數萬に上る。彼等は船から上陸するや否や直ぐに勞働に従事する而して稍々土地に定着するやうになれば何處から集めて來たか知らぬが木材の端切れとアンペラと其處ら有り合せの泥で掘立小屋を作つて生活の根據とする。此の掘立小屋は常に或る集團をなして郊外の野ツ原や山懷に或は崖上などに時には一夜にして一部落を出現することがある。此寫眞は大連寺兒溝の海岸近き赫土の斷崖に出來たタイプカルな苦力部落である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 鹽田潮汐用風車 (産業)

關東州内は天日鹽産地として有數な地位にある。現在
年産額三億斤の生産は將來猶發展の餘地がある。潮汐用
風車は戎克の帆から思ひ付いた頗る巧妙な而も原始的な
動力で、支那人の自然力の利用の巧い處が窺はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



●赤い哈爾賓ステーション (北 滿)

今は早や赤露の旗下に支配せらるゝ東支鐵道の中央ステーションとしての哈爾賓は、日本に取つても伊藤公の死を懷想せしむる深い印象がある。歐亞兩民族の勢力が接衝交錯する國際地點たる哈爾賓の價値は兎に角として一度あの青い光にホカされた夜のブラットホームに降り立つた旅人は、構内のあわたたしい雑沓の彼方に聖像を祭るかすかなる蠟燭のゆらめきを目にじたさき云知ひれぬ旅情の寂しさを感ずるであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 哈爾濱市街 (北滿)

露西亞が五十年前極東に手を延ばして松花江畔の一
地點を選定したとき今の哈爾濱は唯だ蘆荻の中に見出
された一個の渡航場に過ぎなかつた。然るに東支鐵道
東西南各線の中央集落地點として、西歐文明の一大文
化都市が基年ならずして現顯し、何事にもニチオーの
露西亞人氣質は時代が白に變らうが赤にならうが音樂
と酒と女の耽溺の世界を實現してゐる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 寺兒溝苦力部落（大連）

景は時に景ならざる處に生る。東洋の文化都市を誇る大連市の東南端、寺兒溝の苦力部落も一度レンズを通ずれば、皮肉な文化の半面である其處の穢雜醜惡を變じて一畫繪となつて吾人の眼底に映じて來るのも妙である。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 娘々廟の祭典（大石橋）

娘々廟は趙公明の三妹雲宵と避宵と瓊宵を祭神としたもので農民の信奉者が多い。高粱の種子蒔は既に終つて赭土の曠原が千條の畦に依つて整へられて居る。遠景の若葉の森が初夏の風に光つて、四頭立の荷馬車は今日は盛装した村の姑娘（クニヤン）達を乗せて娘々廟へと運ぶ。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 大連市役所（大連）

大廣場を中心にして蛛網狀の道路を經緯せしめてゐる大連の市街は、その大廣場の一角に市役所の堂々たる輪奐を置いて其道路の如き經緯繁鎖の市井凡百の事務に鞅掌せしめ、自治都市としての面目を誇つてゐる。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆大連小崗子(大連)

大連の支那街である隘路の曲折した
處金看板の抑々しい色彩に先づ支那氣
分が横溢して居る。小崗子は十二萬の
人口を抱擁した支那人街である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 大廣場の夏（大連）

大連大廣場のローン、グラウンドは翠緑の毛氈のやうに初夏の光に輝いて居る。朝影傘色その間を縫うて行人の装ひも軽やかに見える。そしてヤマトホテルのルーフガーデンにはオーゲストラが流れ、紅色の電光が輝き夏の夜を飾る唯一の納涼場を開展する。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆大連市浪速町通り（大連）

大連市中の最も繁華な小賣
商店区域で毎夜街頭に夜店が
立って繁華を極める。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆大廣場の朝（大連）

大連市のセントラルサークルとして情調の源泉かのや
うに緑も爽かな草に木々に初夏のうるほひをたゞへ行き
交ふ人の足どりもかるく、なごやかな幸福に充されて居
る。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 戎

克（大連）

幾百隻となく集つたジャンクが、濡帆を乾かしてゐる光景である。油を流した様な雨上りの朝、露西亞町沖は此等のジャンクに依つて埋められてゐる

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 奉天四平街通り（奉天）

奉天四平街は東京の銀座に等しい繁華な街で支那式色彩の頗る濃厚な街である。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 北

陵（奉天の史蹟）

北陵は昭陵とも稱し其の丘を隆業山と名づく。奉天城の北方里餘の所にあり。順治元年八月太宗文皇帝の靈柩を葬りたる所、其の規模宏壯にして松杉鬱々奉天唯一の清涼地である。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 農事試験場の放牧（産業）

公主嶺附屬地にある農事試験場綿羊の放牧である。同試験場は濠洲の綿羊メリノ種を買入れ蒙古在來種に交配して其の改良と羊毛の自給を圖りつゝある。

（印畫の複製を嚴禁す）



◎ 支那老人

(風俗)

支那の百姓程平和の愛好者はあるまい、ターチヤオ大車の上に
憩へる彼の姿の朴訥さよ、一服の臭ひ煙草によつて満
足を得る程の樂天家だ。その顔面の皺の一線にも傷は
れざる人間味の愛と健康の表徴がある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 奉天驛頭の乗物の集合（奉天）

満洲の中央驛なる奉天驛頭に集る乗物の光景だ。露西亞式の幌馬車、英吉利風の箱馬車、日本式の人力、支那流のカマボコ馬車それに加ふるに自動車といふ對照、まだ飛行機のないのが惜しい。汽車の發著毎に此等の交通機關が雲集霧消する有様はもの凄しい。

（印畫の複製を嚴禁す）



◆ 鴨緑江の筏（安東）

鴨緑江ぶしで名高い筏船である。筏の上に小屋を造つて居るのも奇観だ。筏ぶし歌ひ乍らに瀬を越せば谿の鶯つれて鳴く情景を家族と共に味ふことが出来れば船頭の生活も幸福といふべしである。

（印畫の複製を嚴禁す）



◎ 角山寺附近の展望 (山海關)

最近の奉直戦に關ヶ原の如き争覇場裡となつて激戦を交へた角山の一部には展望の雄を以て著名な角山寺がある。山嶺に立てば蕩漾たる渤海の碧波を天涯に懸け一連の石河は白帛となつて大地に迂曲する、左方脚下に薄く角形の影を作つて見ゆるものは即ち山海關城である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大磐石の家 (山海關玄陽洞)

大陸の民衆には何處かにユーモレスクな性格が密んである。一大岩石の空隙を利用して岩窟とは全然趣きを異にした家居を營なんである、其處には嚴肅なるべき生活に何かしらの暗示を投げずには居ない。然も山海關玄陽洞附近に見出した這した大磐石の家にも、奉直戦の影響はあつて一物も残さず剝奪されて荒れ果てたまゝとなつてゐるに至つては、尙更に皮肉である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 曠原の悲劇 (北滿)

東支西部線海拉爾の郊外に邦人の墓地を見出した時
自分は無量の感慨に熱い涙の落つるのを禁じ得なかつ
た。滿蒙の第一線上の末端に位する此曠原の一角に埋
めた同胞の靈は何にか吾々に語る？

(印畫の複製を嚴禁す)



呼倫貝爾原頭の放牧

東支鐵道西部線が興安嶺を越えて外蒙古地帯に差かかる。呼倫貝爾の曠原である。一望千里といふ文字通りの平原に牛群の大集團が放牧されて居るのを見るが之れは附近の部落から各農家の飼養する二頭三頭の牛を集めて日々に野外に放牧するもので、共通の監視者としての若き牧夫に委託されるのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 遼河の流氷

結氷期節の滿洲も二月の節分あたりから何處もなく
春めいた氣分が動き出す。今まで鐵板のやうに張りつ
めた遼河の堅氷が春の心にゆるめられて一夜恐ろしい
爆音を立て、炸裂した氷は、不整形の大塊小塊の集積
を、上流から押し流して來る有様は物凄い光景だ、
兩岸の船人は春の水を見て狂氣のやうになつて河心に
乗り出してゆく。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蘇る遼河の春

河を生命とする船人等は、半歳の長き結氷期に閉ぢ込められて來ん春を待ち侘びた。死せるが如き冬枯の世界にも大江の水は氷の下に流れて居たのだ。春は地の底より湧く？めぐる期節のおだまきに春は先づ河水を温めてあの堅氷の覆を取り除かうとする。解氷の日の河を見たものはさながらの自然の戦ひを感ずるであらう。それは擾亂と激動と爆發と凄愴な光景である。冬眠から目醒めた營口の市街は河岸のかなたに春の光に輝く。

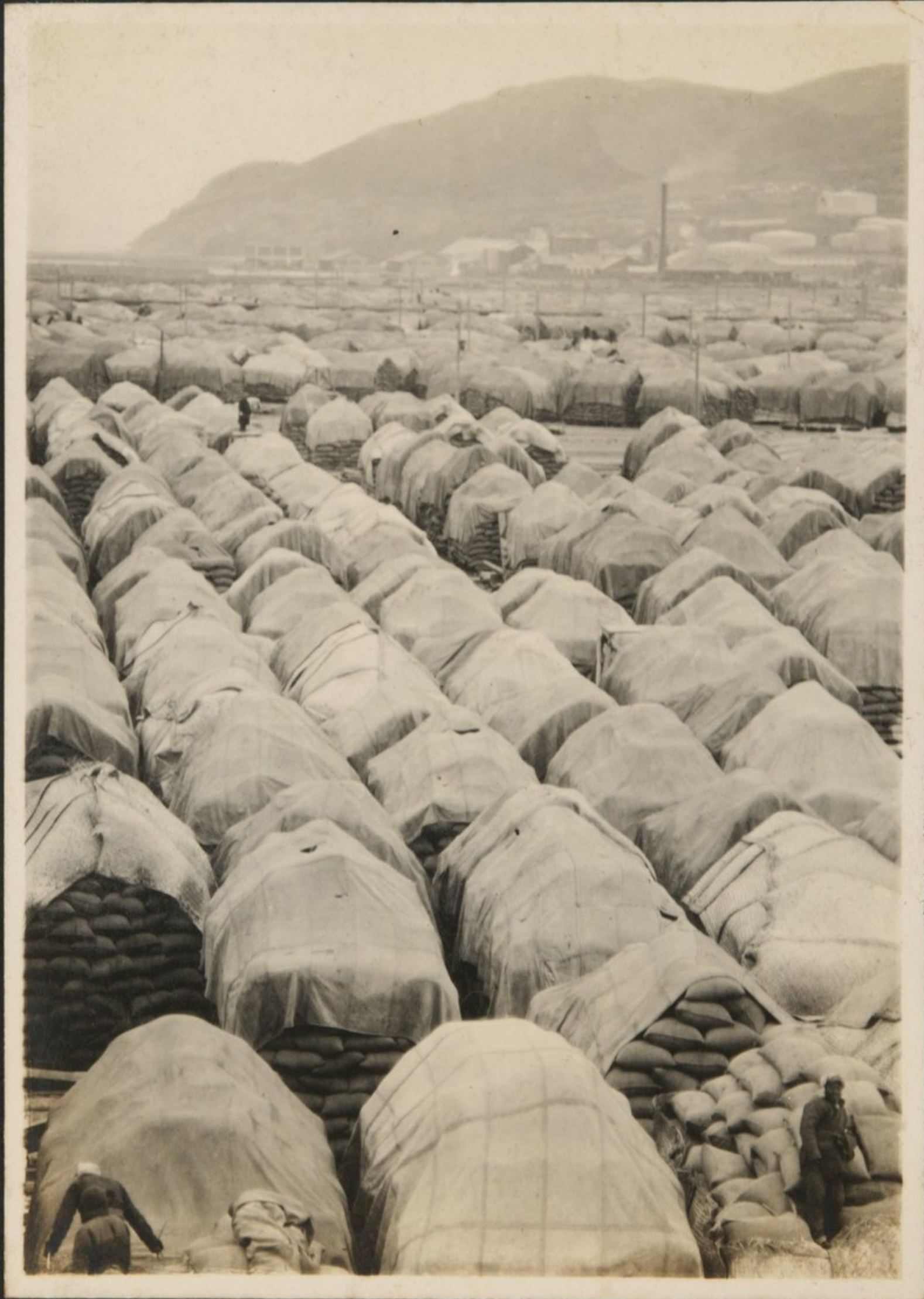
(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 豆粕荷卸作業

油房から埠頭構内に搬入された、その豆粕の積卸作業は一種の技術を要する。彼の豆粕を最も敏速に完全に貨車から卸すには普通二枚づゝ取扱ふのが原則とされて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 特産物の野積

大連至頭構内の露天に於ける貨物収容は多い時は五十萬噸からに上る、奥地から南下する特産の出廻最盛季には寫眞のやうな光景を呈する、而して野積貨物には往々火災の起るので有名だ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 鳥瞰の万里の長城 (山海關)

有史上燦々として世界に氣を吐くものは二千三百年以前の偉業を語る万里の長城である。一日十八回の食を給し不幸にして死する者あらば壘下に埋めで人柱とし以て國家の守りたらしめた云ふ口牌は今も附近の里人の間に傳はつて神業の如くしか考へられぬ偉業に現實味を投げかけるのも頼もしく嬉しい事ではないか。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 狼 煙 臺

(山海關)

敵襲に備へる爲めに萬里の長城の所々には狼煙臺がある。臺上遙かに信號を認めて人走り、馬啼いた時代を想起すると思ひは百年の昔に及び、或は千年の昔に還へる。上方に伸びて展開する土地は關内であつて山海關に面してゐる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 蒙古の王さん (風俗)

蒙古の王族も共和時代になつては名ばかりの王様になつて了つた。清朝の頃京師に参観して所謂文化生活を味ひてから、蒙古固有の精好の氣はどこへやら陣笠然たる官帽を頂いて今に昔の夢を繰返して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 搾 乳 (蒙古)

生活物資に缺乏した蒙古に唯一の滋養食糧として與へられたものは牛乳である。牛乳は勿論生では保存が出来ない、貯蔵は先づ加工法の工夫から始まる。蒙古人は酒も牛乳から造る、バター、チーズの固形物を得るためには彼等は相當の苦心と犠牲を拂つた後の経験であり發見である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 山海關城壁

今から四百五十年前の築造に係るもの萬里の長城は此の城壁に添ふて角山寺高地へ登つて行く。明末滿洲民族の興起に依つて京師の物情は常に騒がされた時胡狄の防備に築いたのが此の天下第一關である。城壁の高さ四十尺、厚さ二十尺周廻三哩に渉る堅城鐵壁である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 二郎廟附近の山勢 (山海關にて)

恰かも盆石の配置をそのままの自然をポーズした
處に此の寫眞の價値がある。處は遼西の名所山海關附
近二郎廟と俗稱されて居るが第二奉直戰の激戦地とし
て名高い。山峽を曲折して流れ来る水の清冽には一層
の美感を加へしめる。此の河の名物は鮎だ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 錦 州 漬

錦州は京奉線中古來からの大街で遼西の衝路に當る
此處の名産は漬物で、旅の土産には恰好のもの、問屋
の庭先、露天幾十の醬甕には可愛い胡瓜やさゞげが自
然のままに鹽藏される。支那は漬物に於ても私達の先
生であつたのだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 蒙 古 へ (錦州にて)

東蒙貿易の衝路として遼西に錦州驛がある。蒙古通商は總て馬背或は駱駝に據るのであるが錦州の間屋から運ばれる物資は綿絲布とか燐寸とか色々日常の雜貨類を持つて行つて歸路には毛皮、甘草の類と交易して來る。旅の朝古城を後に軽い黄塵を擧げ乍ら馬の頸鈴の音を立て、行く處は如何にも古典的な情景である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大豆囤積 (開原にて)

特産の出盛りに鐵道沿線の各驛に集積する大豆の總量は實に大いしたものだ。此季節に糧棧の庭先にはアンペラ圍ひの貯藏庫が急造される、之れを囤と稱して簡易な造作であるが穀物類の蓄積には理想的のものである。一山約五百六十石(百二十噸)の容量を有し高一丈六尺、直徑十尺位、屋根の構造も勿論風雨に堪へられるものだ。貯藏大豆を取出す時には側腹に穴を明けて自然に流出させる點など却々勞力手數の簡略法として妙を得て居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 苦

力

(開原にて)

苦力の労働力は絶對的に動物化されて居る點に於て
確かに世界に比類のないものである。彼等は最低限度
に於ける食糧の保證を與へられて居るならば決して他
に多きを求めない。常備苦力の給金月僅かに五圓を出
です、彼等の労働時間は一日僅に十五時間を働くので
ある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蒙古包 (蒙古)

蒙古人の家屋を包といふ、水草を追ふて遊牧する彼等の住居は移動式であるべきは當然である。錐圓狀に圍つた簀子張と云つた恰好、骨組みは適當の枝條を矢來に結ゐた頗る丈夫なものである。冬季は獸皮を以て全部之を被覆して防寒する。背後に見ゆる枯枝の垣根は小牛を屯する檻である。包も開放地に近くなるに従つて固定的に泥を塗つたのや窓を明けたのや段々進化したものが見らるゝ。

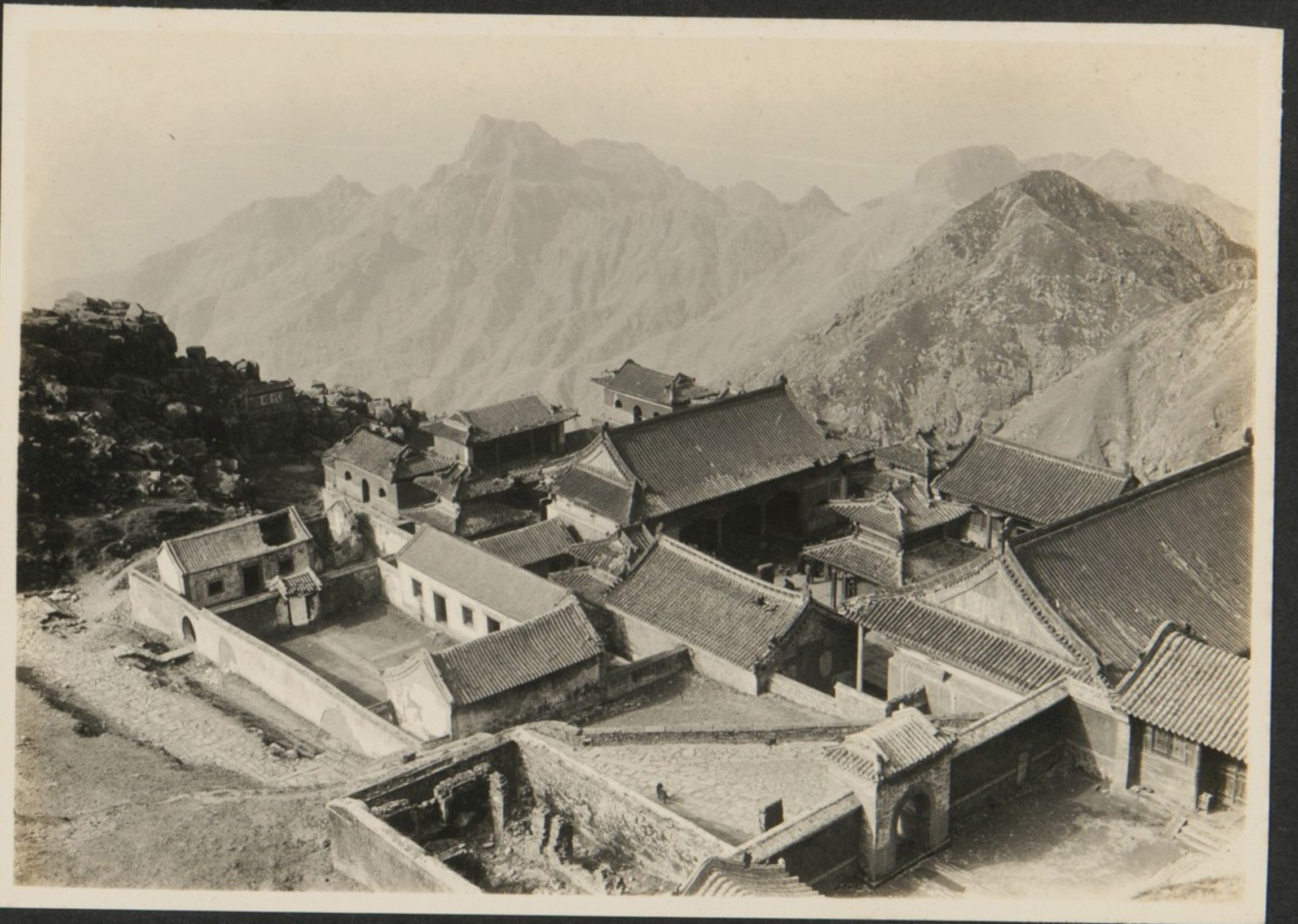
(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 窓を有する蒙古包 (蒙古)

移動式天幕の蒙古包の固定されたもの興安嶺麓正に
盡んとする一帯にある。包に壁を塗り窓を明けた處に
家屋としての包に進化を認めねばならない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 泰山の山頂から (山東省)

泰山連峯中に徼徠山がある。突兀として聳立してゐる。山容は確かに泰山連峯中の白眉である。山中には徼徠名所として幾つかの寺觀が深山幽谷にその景趣を添へて居る。近來歐米人の別荘も建てられて避暑客を呼んで居る。山嶺に立つて白雲の去來する間から脚下に展開された山東平野を俯瞰した壯觀は何んとも言はれない。眼界遙かに汶河の流れが蜿蜒として白く下界に光つて見ゆる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 泰山碧霞元君廟 (山東省)

支那五岳の中最も古く最も有名なものは泰山である。海拔五千四百尺の山頂、丹碧燦たる一殿堂が仙宮の如く空中に浮出されて居る。之れは道教の本山碧霞元君廟で俗に泰山娘娘と稱し宋代以來北支那に於ける民間信仰の一大標識として年々數十萬の登山者を招いて居る。子孫を授け富財を與へる神力のあらたかなること此の元君廟に如くもなく、道士は廟前に賽する善男善女に賽錢の増額を強要する處など泰山ならでは見られぬ圖だ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 經石峪 (泰山)

泰山の徑石峪は谿谷に開かれたる約七十平方尺位の河床の巖面を利用して金剛經を刻したもので文字の國支那ならでは見られぬ偉觀である。一字の大き一尺から一尺五寸方形の大文字で六朝式の書體は豪宕塊麗千古にその雄渾なる筆勢を示して居る。今日筆者の何人なるかを確證するものがないが附近の徂徠山に在る般若經の石刻と書體が類似して居るといふので北齊王子椿の書だと推定するものがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 石 摺 り (泰山)

泰山の石摺りは内外に有名なものであるが、千數百年來風雨に曝された自然巖の大文字を古雅な石摺りにしたものは確かに觀賞家の垂涎に値するものである。風のない日泰山の經石峪に行つて見ると白地の緋のやうに巖面の刻字の上に白紙が張られて石摺工は刻命に捧先に墨汁をつけて紙面を叩いて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 帆かけ一輪車 (山東省)

支那人程自然力の利用に巧みなものはないといふことは毎度感服させられるが一輪車に帆をつけて勞力の節約を計つて居るなどは天下の一品だ。而して支那の原始的慣習からいへば車は引くものでなくて押すものである。彼等は鋸を使ふにも鉋を用ゆるのも日本人の習慣から見れば皆な逆に力を用ゆるのも妙である。

(印畫の複製を嚴禁す)



① 一輪車 (山東省)

車は兩輪と極まつて居るやうに考へて居るものは支那内地に入つて一輪車の利用の多いを見て鳥渡驚かされる。併し車といふものゝ進化は恐らく一輪から發達したものである。車で調節しようといふのではない。車上の乗客に依つてその平衡を調節するのだ。乗る人間も押す人間も共に七分三分のかね合ひで協調をうまくやらないと危険だといふのが一輪車から學ぶユウモアである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 娘々廟の祭典 其一 (大石橋)

胡藤の花咲く五月の末、滿洲の年中行事である娘々廟の祭が各地に催される。その中一番有名なのは大石橋迷鎮山のそれである。大祭日は毎年舊曆四月十六日七、八日の三日間に渉りて、沿線の老幼數十里を遠しませず之れに賽するもの何萬人たるを知らない。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 満洲婦人の髪飾

(湯園子)

満洲旗人の風習を傳へて居るさいふ婦人の異様な髪飾は祭禮の日を飾る装束としては如何にもふさわしい。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 牡丹臺の展望 (朝鮮)

平壤牡丹臺の天下に名だゝる所以は敢て其鮮麗典雅山水の趣からばかりではない。其の乙密臺からの願望は脚下に大同江の碧流を招き鍊光亭、浮碧樓の丹彩は、綾羅島を隔て、向岸船橋里を呼び渺々たる一小丘阜にして然も遠く雲烟萬里千里の視野を展開し雄大無比の絶景を支配する處に眞價はあるのだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 京城全市街（朝鮮）

南山と北漢山の盆地に展開した京城の市街は、さながらの京都の街を思ひ出させる。李朝五百年の榮華を偲ぼしむる丹青の宮殿樓閣も町の品位を尊いものにする。鐘路街頭萌黄色の覆衣をして往く婦人の姿を見たものは日本の平安朝時代を懐古するであらう。

（印畫の複製を嚴禁す）



● 楊貴妃の舞

支那劇は日本の芝居の起源より遙かに古く、既に三千年以前から組織立つて居たと曰はれる。現時中國の南北を通じて普通に演出される支那劇は二黄と西皮の兩戯曲であるが然しそうした長い歴史を有するにも拘はらず、其衣装なり、頭髮冠帽なり、劇の演出方法には大した變化はないそうである。寫眞は中國北方梨園界の梅蘭芳と並んで南方の總帥たる大立物歐陽予倩氏が楊貴妃に扮装せるものである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 支那戲伎 Ⅱ 漁家樂 Ⅱ

一体支那では舞踊は餘り發達の跡を見ない、彼等の舞踊は稍々もすれば曲藝に類するものに墮する傾がある、足どり手振りの處作はたゞ單に樂につれ歌に合はするデエスチエアである、そこにはまだ曲線の美はない、歌意を表現する含音が伴はぬ。その點に於て舞踊も亦劇と同じく觀るべきものでなく聽くべきものかも知れない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◆ 蒙古牛車 (蒙古)

日本人には廣いといふ感じは海を見た時にのみ其最大限を意識する。然るに蒙古の平原に於て見る廣茫たる景色は眞に驚嘆すべきものがある。日は原から出でて原に入り、四方に擴がつた地平線内には一物の遮るものがない。アノ草原に轍の跡を印し索り行く牛車は何處の部落をさすのであらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 街頭の駱駝 (滿洲里)

國境の滿洲里に汽車を捨てた旅人は、街頭先づ此の駱駝の一隊に驚異の眼を見張る。駱駝はごう見ても町のものではない。あの脊の上の瘤、生真面な面、而して悠容さして迫らざる歩度を以つて進み來る彼等は野人の京見物さいふ型だ。駱駝の産地は外蒙西藏寄り地方で内蒙はその産出を見ない。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 千山無量觀境内の日時計 (南満)

千山の道士は白雲を衣とし、霧を食とする底の仙人生活で、山中暦日などないかと思つたら無量觀の境内に計らずも日時計を見出した。道士が日時計の針影を眺めてゐる光景を見て居ると何さなく原始的の感が湧く。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 無量觀の展望 (南滿)

自然の雄と人工の妙と此の二つの融和を欠く怨みの多い千山に無量觀は僅かに兩者を併せ得て氣を吐く概がある、その奇岩に倚る布置、その綠陰中より雄大の視野を占むる按配は、千山を滿洲第一の勝とする時、無量觀は正に此の千山を代表する名勝であつてその名聲を恥かしめぬものである。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 孔子廟奎文閣 (曲阜)

日光廟の輪奐は精巧緻密を以て顯はれ、聖廟の結構は雄大宏壯を以て誇るに、何れを兄たり難く喧傳されてゐる。その孔子廟内の奎文閣は金の明昌五年(一一九五年)章宗の命名したもので間口九〇尺、高さ七五尺、奥行五五尺に亘る結構は壯麗を極め、幾多觀客を恍惚たらしめるものがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 洙 水 橋 (曲阜)

史記に云ふ「孔子教を泗洙の上に設け詩書禮樂を修む」を、其古事を偲ばしむる洙水橋は石欄干の古色優雅な太鼓橋である。橋下は即ち玉帶河で所謂洙水ではない。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 税 關 棧 橋 (上海)

支那の税關制度の起源は遠く周代に溯ることが出
 る。由來の支那では洋關の通常の關稅は、
 歐洲人の漸つては、海關の四所を設けたに
 上、廣東、寧波、福州、汕頭、香港の五
 處に、長髮の亂後、關稅監督官の選任を
 英國の三國に譲り、今日では、關稅の
 復た活した。國の支那に於ける第一の
 國稅管理權を握つて居る。上海の全支
 易の港は、支那の半分の盛んなり、
 居る。二億から三億の關稅を納め、
 額三億から四億の關稅を納め、
 居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 黄浦灘路二バンド (上海)

國際都市として世界の諸民族二十七ヶ國の混合雜居
 の上海はコスモポリタンの街として他には見られぬ
 色彩に多様な開港以來急速なる發展を遂げた。最近
 對外人口は五十萬を稱する大上海を現出した。最近
 上海は楊子江の一分流黄浦江口十三哩の左岸にあ
 り、通稱バンド(黄浦灘路)と呼ばれる繋船區域は
 各國の代表的銀行會社の商業機關が集合せる國際
 的經濟戰場で、高壯なる大ビルデックは河岸を壓して
 建ち列ぶ。街頭に客待つ幾百台の自動車の行列は近代
 文明の象徴の如く正に東洋一を誇つて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 罷市中の南京路 (上海)

最近南京路事件の發端地であり、上海第一の商業中樞區域である。平常ならば織るが如き各種の交通機關で市道は埋まり、行人の肩摩殺撃で歩行の自由を奪はれる程の人道、兩側の各商店の店頭から掲揚される各種の旗は街頭に五彩の渦巻を起して所謂上海氣分を漲らす。六月二日些細なる國際感情の衝突から此の街の一角に發砲の不祥事件があつたのをきっかけに支那商店は一齊に全罷市を斷行した、而して日英を標的として猛然たる排外運動は燎原の火のやうに支那全土に瀰漫した。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 寒 山 寺 (蘇州)

寒山寺は楓橋夜泊詩「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」の有名な詩と共に古くから我が國に知られた寺で、蘇州城外西、里余の所にある。寺は約千四百年前梁の武帝天監年間、に起り當時は妙利普明塔院と稱した、其の後火を失する事五度に及び創建の歴史は古いけれども現在のものは割に新しい。文徵明の書になる張繼の詩碑以外には見るべき遺跡の何物も残つてゐない。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 寒山寺の詩碑 (蘇州)

張繼の詩は唐時代のもので、最も古い筆者は宋王郁
 公の筆になるものであるが、今はそのあとかたもない
 上に、明の文徵明の筆になるもので、之も度々の炎
 ぎ合はれて壁間にはめ込んである(寫眞左端)
 新碑(右端)に立つてゐるは清末の大儒者俞曲園の
 筆になるものである。尙同詩については昔から種々
 異論があつて詩中「江楓漁火」は江楓でなく「江村漁火」
 が本當だといふ説が有力で、新碑の筆者である俞曲園
 も碑面には江楓と書いてあるが裏面には江村が事實ら
 しいといふ考證文が刻してある。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 女 夫 船 頭 (上海)

上海には水上生活者の群れが可なりに多い、夫婦一代は兎に角子々孫々船を唯一の世界として板子一枚の下は地獄と観じて居るかどうかは知らぬが、棹一本、櫓一丁の元手で女夫共稼の渡世は割に平和だ。南方の支那では婦人に纏足なごをして鴛鳥のやうな歩方をして居るものは一人も居ない、男と一緒に労働に服して生産に努力する處に彼等の強味がある。上海を中心に女權運動の盛んなのもあな勝女船頭の影響とも云へまいが、女はその足からの解放によつて先づ新しい生活に目醒めたのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 小 渡 船 (上海)

河流の多い南支の風景は到る處水郷の感を起させる
従つて船運の便が發達して古から操舟の術が發達して
居る。燕のやうな櫓部の恰好も面白いが半圓形の屋根
を設けた下には船頭の生涯を托する小天地がある、朝
には吳客を迎へ、夕には越人を送る渡船業者の人生觀
こそ聞かま欲しい。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 明孝陵 石獸像 (南京)

陵道の兩側約一哩餘の間、七八十歩毎に石像の獅子、象、駱駝、麒麟、馬、文官、武官、等が道を挟んで立つて居る。

これは人蓄を始め森羅万象皆帝王の陵基を守るといふ意味から建立したものでその小さいもので七八尺、大きいものは二十尺餘にも餘るものが一塊の巨大な巖に彫刻されて、驚くべき異觀を呈して居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 雪の 柚小屋 (興安嶺)

汽車を捨て、四十四露里、北滿唯一の高地(海拔四千尺)興安嶺がある。そこには零下四十七度のレコードがある。水も木も石も萬物はみな凍る。

その寒さに丸太を積み重ねた露西亞式の柚小屋からほそくさ炊煙が上つてゐる。霜花曇々となる夜、雪に冴ゆる青白い月光、夢路は何をたごるだらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 連山關附近の雪景

(安奉線)

凍結した路上の雪は歩けば憂々音して足下で軌し
る、街への労働に出かけた苦力は、西に傾く太陽に感
謝しつつ、山陰の己が村へ急ぐ。白雪の衣に装はれた
冬枯の山は美しい笑をもて平和の休憩にまで彼れを迎
へる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 興安嶺の白樺 (北 滿)

白樺の森、それ自身は既にロマンチックな感じを與へる。それが雪原の中に見出されることに於て一層深い印象である。五、六月頃雪消の春光にあの夢のやうな若芽の出る光景を想像するだに一種の感激ではな
いか。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 霜 の 花 (北 滿)

霜の花の華麗、壮美は曾つてスカンヂナピアの冬の物語りに見、北獨逸の都に現はれ、時に北京の冬の朝に眺めらるゝ事を旅人の話に聞いた。今興安嶺の山中零下三十度の嚴寒冬中に圖らずも之を見てカメラの中に納めることが出来た事を喜ぶ。

霜花の成因については科學的には面白い研究であるが、通俗に之れを解釋すれば空中の水分が枝條に附着したのが強烈なる寒氣に逢ふて結霜するので天巧の神秘だ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 船の部落

(南支)

昔からの諺に船陸に上るさいふこがあるが水郷の南支には往々船で造られた一部落を見出す。正に文字通り船陸に上つたのだ。まさか水害を恐れて船型に家を造つたものではあるまい腐朽して水上に適しなくなつた古船は陸岸に引上げられて隠居さす。同時に老人や子供等も此の家に移されることだらう。菰を以て覆はれた屋根、無雑作に明けた窓、これも水陸生活の推移を物語る人間史のドキュメントであらねばならぬ

(印畫の複製をお断りします)



◎ 乞 丐 船 (南 支)

水の世界に見出した花子(乞食)の生活には矢張り船もいけば權も要る、女なるが故に兒を抱いて居るのも怪しむに足らないが、乞丐船の存在はどうしても水郷でなければ見られぬ圖だ。漂浪の生涯を眞に板子一枚に托して西に東に水草を追ふ彼等は陸に見出す乞丐よりも反つて氣樂さうにも見ゆる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 蘇州城外の運河（南支）

蘇州は古來上有天堂、下有蘇杭と謳はれた程杭州と共に山水有勝の地である。往昔吳の闔閭王が伍子胥に命じて築城し周圍四十七支里古は天の八風に象りて陸門八、地の八卦に象りて水門八あり頗る偉觀を極めたと傳へられる。

物變り星移りて風雨二千有五百年、姑蘇城外に夜半の鐘聲が聞いた客船には何處の有情子が乗つて居たか河水空しく流れて城壁の黒煉瓦は苔徒らに青い。

（印畫の複製を嚴禁す）





◎ 橋

(蘇州附近)

水から見る表蘇州の街區と街道の聯接は言ふ迄もなく橋である。しかもその橋はアーチ型に半圓を描いて水面にその影を落す處に全圓形を現はして如何にも巧みなる美を表現する。橋上の廟も風致としては却々に面白く支那でなくては見られぬ景趣である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 水田の灌漑 (南京)

三伏の暑熱は生けるもの、總てを旱魃の憂にまで導く、瀬戸の裏田には今日も水揚げをせねばならぬ。チヨロ／＼小川に水揚機を据つけた佃達は鄙歌面白く二六時中一種のリズムを起して勞役に従つて居る。省内何千萬石の江蘇米の産出はかくて粒々辛苦の賜である之れも夏の日の情景の一つだ。

(印壽の複製を嚴禁す)



◎ 支那農家 (南滿)

下層の支那農民の貧しい生活費の中一日の食料費は
タツタ八錢六厘ださ聞いたら生活難に憐む日本人など
は吃驚するだろう。前庭の高梁畝は既に秋の取入れを
済ませて来る冬の生活には差つかゑない農民の安らか
さを見る時、安泰を装ふ王侯の生活よりもプロの幸福
はこゝにある。

(印畫の複製を禁嚴す)



◎ 天 齊 廟 (大連西崗子)

天齊廟は道教の一種として取扱はれて居る。支那最古の信仰で後代道教と結び、佛教を取入れ今日に至つた最も普遍的な支那の宗教である。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 至聖孔子の墳塋 (山東曲阜)

濟南から八十哩の處に曲阜驛がある。驛から更らに六哩にして曲阜縣城があり、城外約六萬坪の地を相して大聖孔子の墳域が築かれて居る。舊紀には家の高さ一丈五尺南北五丈東西六丈五尺馬鬣の如しとあるが現在には圓形の土饅頭である。至聖文宣王の諡號は元武宗の追封したものである。靈界の偉人こゝに瞑して既に二千年、東洋文化の發祥は長しへに此の曲阜の地に輝いて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 石

門

(山東曲阜)

曲阜の孔子廟に行く参道に牌樓がある。此の牌樓は支那の何處にも見出される頌徳門で孔子の人格徳望を永遠に傳ふるための紀念物である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 支 那 兵 (山海關にて)

彈丸袋を肩に掛けて、付け劍も物々しく直立不動の支那兵は決して我が將卒から見劣りはしないが、然し自己のパンを安易に得んとして軍服を着るものと、國家の干城として赤心奉公に盡すものとの間には、已れ一個を脊負つて立つのと、國家を自己一身に擔ふとの差別がある事はごうする事も出来まい。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 蓮歩 楚々 (湯崗子)

湯崗子温泉對翠閣から不圖窓外に目をやると池の畔
三々伍々佳人楚々として蓮歩を運ぶ。日支共存共榮の
立場から支那館龍泉別墅を加へた。温泉は年一年と所
期の目的に近づきつゝあるは自他共に慶賀に堪はない

(印畫の複製を禁嚴す)



● 釣魚臺附近 (安奉線橋頭)

滿洲耶馬溪の俗稱ある形勝地で、翠松紅蘿を點彩した斷巖絶崖が細河の碧潭に臨んで數十町の間壁立して居る。汽車はその崖下を走り車窓の眺め旅情を慰むるに足る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 釣 魚 臺 (安奉線橋頭)

橋頭驛から約一里細河に沿ふて車窓から眺めらるゝ
峽谷の景色は遠く塵界を隔てたものである。
その中風光の最も明媚なる所を釣魚臺と名づけ断崖絶
壁の下、碧潭深淵をたたへ山水の景風滿洲第一の稱が
ある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 哈爾濱街頭所見 (北滿)

さながらゴルキーの「どん底」に出て来るやうな場面である。舞臺をそのまゝの息苦しい現實だ。空の鳥には巢があり、野の狐には穴があるけれども、彼等には枕する處がないのだ。ロマノフ王朝の政治が民衆をあまりに懸絶し過ぎて居た結果は、富豪顯紳の乾坤一變、無一物とされた結果は隨所にこんな悲惨が演ぜられたものだつた。世に急轉直下の流轉は哀れなものはない。
(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 北陵の山門 (奉天)

由來靈地と樹林とは不可分のものと見ゆる。だがそのうだからとて自然のままに放置することがより神聖さを加へることは思へない筈なのに、現實に即することしか知らぬ國民人達はともするに靈廟を荒廢に委してしましてゐる。祖先の祭り、それを絶やす國民が國政に冷淡なものも決して遇然ではないだらう。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 鴨綠江上流の朝色

雲の奥に潺湲の響きを包み、朝色未だ調はざるに早
筏は雲の絶間を雲に追はれ、哀切なる労働歌に初秋の
憂ひを長く引いて、二百幾十餘里の長い流浪の一頁を
繰る。山靈を溶ひて飽く迄も清澄な水も、果ては世の
怨みを泛べ、耻を流して、争鬭の人生を横切つて河幅
七八十間「十字」に開けば真帆片帆の鴨橋下に混濁に凍
る。今は只徒に山の紫を抱いて片塵も止めず、六根清
浄の雲外の杖は暫くはこの聖流に添ふて白頭山頂へま
導かれて行くのだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 天池湖 その一 (白頭山頂)

圓頂緩斜、女性的なふくよかな山肌は白銀に輝き茲
八千尺の白頭山頂、秀巒五座を擁して千古の雪を溶か
し一碧の銀鏡を抱く。天池湖と呼び周圍三里、常に妖
氣を含んで凄麗、マンテの神曲の巨人が繋がる、寒冷
地獄を聯想するが如く、異様なシヨックを享ける妖美
な非現世的な景趣のものである。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 天池 湖 その二 (白頭山頂)

鮮人は彼等の始祖「檀君」の降臨した處を傳稱し、支人は清朝祖發祥の地と傳説する。潭心より生れ出た妖美な女性が、情炎の黒髪、魅惑の朱唇に妖艶な悶々を單めて銀砂に眉柔かにまごころむ或日、黒い雄蝶はその朱唇に宥されて三日四日遂に陶惚として愉悅に慄へて死んだ。間もなく美女は偉丈夫を産んだ、それが清朝の元首愛親覺羅であるを傳へてゐる。石を投じ血を流せば忽ち水は怒る、日露役前露人三名水深を測らんとして山鳴り水逆だち須叟に湖底に奪はれたといふ、あやしくも美しい湖だ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 白頭山の遠望（無頭峰にて）

麓を捨てて約七千尺にして無頭峯の頂上は燦爛たる花の高原を現出する。落葉松の密林を越して右より二次の高峯は目ざす白頭山である。聖女の愛にも似たお花畑を過ぐれば浮石シユウキスの沙漠のやうな地帯となる、何かの終焉を想起する、索莫たる空洞の音をたてて四里進むと白頭山に達する。

（印畫の複製を禁厳す）



◎ 山頂の火口壁 (白頭山)

桔梗色に霞む湖面に山巒より脱れ來た風は漣浪を起して湖心めがけて千條の銀龍を走らせて相寄り相抱いては消れてゆく、湖面に添ふ地肌は黄白に赤黒に弧は圓に三角は菱に水に影を抱いて千態、あやしくも古代の紋様を描く。そこには草の葉一ゆらも見出せない。所々の斷崖は浮石ピユウミスの小さな銀砂は吹き上げられ吹き下ろされて銀帛を懸けたるが如く、湖面に裾を濡らして連りこの靈湖に亦神韻を深くしてゐる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 上流の處女林 (白頭山附近)

鴨江の上流長白山脈の一帶連亘實に二百三十万町歩擁材量十數億萬尺^ノ(尺^ノは十二立方尺)に及ぶ無邊際の大樹海が、枯腐すれば空しき終焉の地響きを立て、斃れ、跡よりは水々しき樹肉の新緑は榮えて、徒らに密に枯榮幾千古、絶て斧鉞に冒されなかつたが茲に二三十年來近代的産業文化はこの靈境秘庫を雪崩の如く蠶蝕し、丁々發矢、斧は霜に燃ゆる紅葉を散らして千古の靈木は市に鬻がれるやうになつた。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 國 境 碑 (白頭山)

圖中頭部山合より右へ下り降つて豆満江となり、左の山頂より右へ流れ左へ曲折して谷間を走り鴨綠江となり、永久に脊いて世を隔て國を隔つて流れて居た。康熙帝の時宇、臣穆克登をして此所に境界碑を立て、國境を定めた。今は水涸れ往昔のせ、らぎを立てて流れた姿の儘の輕石は銀色に輝いて、紅玉色の苔、黄白紫の野生の花に圍まれ、碑は今も昔嚴然として征服の歴史を物語つてゐる。

(印畫の複製を嚴禁す)



⑤ 筏 組 み (鴨綠江上流にて)

朔風心腸に凍る吹雪に膚肉を裂き、牙はかへる夜馬賊の銃火に魂消はて十月より十二月迄貧しき生を營む三万の樵夫の雪の一冬、嵐の一冬。勞役の困憊を罩むた探木は、春めぐり来て雪解けの水温めば、小川を傳ふて一本亦一本、水を堰めては流し、流しては堰めて或る地點迄來ると流材は丘に上げられて切口へ穿口し檜の細木を擦ちて柔軟にしたもので穴を綴つて再び浮された時はささやかな人生を流す筏となる。

(印畫の複製を嚴禁す)



筏

(鴨綠江上流にて)

山から切り出された木材の一本々々が狭い谿谷を傳ふて流下すると筏作業に差支ない場所に貯藏されて一定の筏にまで組立てられる。一竿の棹を頼りに鴨江百数十里の間幾多の急湍深淵を乗り越して支那と朝鮮の國境を綾手に漕ぎ乍ら流れにまかせて下るのだ。江岸の春空しく老いて谷の鶯青嵐に吹き送らるゝまゝころ早瀬を過ぎる筏師の魂は自然の交響樂に魅せられて、彼の喉頭思はずして鴨綠江節の一曲が歌はれる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 三 池 湖 (白頭山附近)

海拔四千尺の虚頂嶺は又しても迷宮の如く鬱蒼たる原生林中に登山者を導き入れる。斜陽は閑寂に煙つて怪しくも囀り移る禽鳥の飛去る處三池湖の水魅惑的に神秘の姿を現はす。森に圍繞された三つの湖は半里ばかりの間に連なつて清澄、湖心の静寂は創世紀時代の深い沈黙その儘に世を隔てた情趣である。

(印畫の複製を嚴禁す)



正陽門の譙樓 (北京)

正陽門は内城への中央に位して居る。北京では俗に前門と呼んで居るが、附近は商賈櫛比してメンストリトたる貫録を充分に備へて居る。北京に遊ぶ旅人の印象はまづ内城を圍む高さ三丈五尺余の城壁と九つの門とである。ギラルドが城壁を避けては歩けぬと言つた位で、中にも二の正陽門は明の永樂年間の榮華を沈黙のうちに物語つて居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 玉泉山から見た水田 (北京郊外)

昆明湖の水は元の世祖が北京の城内に導き、十刹海や太液池となつて水に乏しい北京人士に偉大なる恩恵を與へたが、更に乾隆帝は玉泉の水を昆明湖に、そして附近の水道を浚渫したので其流域は豊かな灌漑を得たので水田大いに拓け稲米の利を收めるやうになつた。自慢しただけであつて水は渾々として湧出し、しかも極めて清冽。水田を隔て、萬壽山を望む。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 香山の古塔 (北京郊外)

「西山香雲」を以て北京八景の一に數へられてゐる香山は萬壽、玉泉を共に西山三山として知れてゐる。遼の中嗣阿里吉の宅跡に依つて香山寺を得たが金の大定二十七年その世宗により改築され大永安寺(甘露寺ともいふ)と呼んでゐるが、巖石に壑を架し五層樓上の眺望また凡でない。其後乾隆帝の修築から靜宜園と名づけ結構の美を備へたが、清末以後荒廢に委せ昔日の面影更になく、七層の古塔のみ、寂しく中空を睨んでゐるばかりだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 石

舫 (北京萬壽山)

長廊を西に進み、秋水亭清遙亭等を過ぎると寄瀾堂へ出るが大理石船で有名な石舫がある。上部のみ木材を使用してはあつたが、華麗なる彩色や彫刻はさすがに智謀術策を漲らした西太后の權勢を偲ばしめる。ここでなにかを奮發すれば紺青の湖上にゴンドラに似た船で淺酌低唱も御意のまゝであるし、おうような櫓の音を聞きながら對岸の龍王島へ渡れるのだ。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 寶 雲 閣 (北京萬壽山)

山頂佛香閣からは緑林を縫ふて西へ下ると銅ばかりで作ったさいふ寶雲閣がある。なるほご一本の柱から家根瓦の釘まで一つとして銅以外のものは使つて居ない。全く豪華なものだが萬壽山中幾多の廟宇の極彩色の華麗さに比べて、これはまたなんといふ冷たさなんだらう。遙かに雲烟模糊さして昆明湖から玉泉山の塔や近郊の長閑さが望見せられる。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 昆明湖より佛香閣を (北京萬壽山)

船を湖心に泛べて指せばありし日、西太后が文武官と侍女達を伴つて畫舫の疲れをも癒した停泊所から右手に佛香閣の三層樓と三體佛を祭る頂上の萬佛樓を見更に芦荻茂る昆明湖畔から中央に昆明湖の碑と遠く玉泉山の玉峯塔を望めるのである。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ ラ マ 塔 (北京萬壽山)

萬壽山の帝王豪奢の趾を見るもの、中、學究の徒を除く外、西藏直營になる廢寺のラマ塔に留意するものは尠い。遙かに四方を俯瞰して眼界更に天地もなきありし日の西太后の權勢を偲ばせて轉た今昔の感が深い

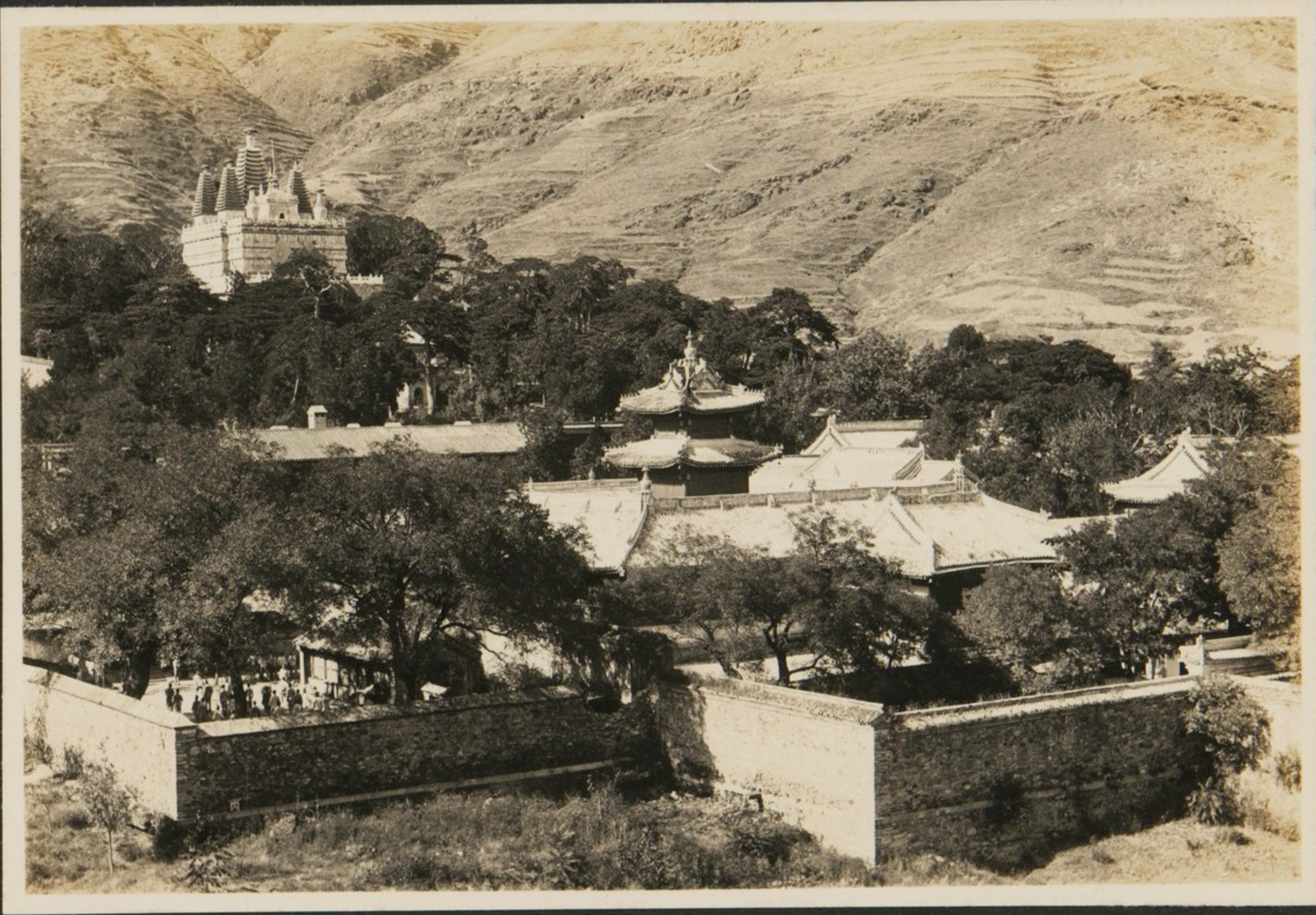
(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 十七孔橋 (北京萬壽山)

萬壽山の全景を眺めるのには佛香閣前の高臺の外にこの十七孔橋がある。龍王島への連絡に架せられたものであるが大理石造の玉帶橋で十七の穹の上に長さ三町にも及んで居のは蓋し偉觀である。橋上に佇んで右顧左睨するときは、其處には廣漠たる萬壽山境域に低く高く幾多の華麗なる樓閣が昆明湖上に倒影するあたり此處に遊ぶものゝ味の味はひ得る喜悅でなければならぬ。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 碧 雲 寺 (北京郊外)

碧雲寺は元の耶律楚材の裔阿勒彌が其宅を喜捨して
建立したのに初まつて明の天啓年間魏忠賢の修營に依
つて結構の美を極め、更に乾隆年間に羅漢堂や藏經閣
等を増築したものである。寫眞左上は印度須彌山の金
剛寶座の型に仿つたといはれてゐるが、大正十四年十
月七日支那革命の急先鋒である孫文の遺骸を安置する
ことになつた。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 碧雲寺金剛寶座 (北京郊外)

碧雲寺の金剛寶座は乾隆十三年(西紀一七四八)西藏僧が齋らした印度須彌山の金剛寶座の模型によりて築造したもので、其の用材は委く大理石の巨大なものを用ひ外壁には佛像、獅々頭、種々の花紋等を彫刻し背面の龕中には黒玉の佛像を安置し實に雄大莊嚴を極めてゐる。臺上からは玉泉、昆明の湖水がはるかに見へ背後は大行の山脈連なり風光また絶佳。

(印畫の複製を嚴禁す)



① 鳩 賣 り (北京所見)

北京情景の一として忘れられぬ印象を與ふものは、冬の空に鳩笛の音色を聞くことである。飼鳩の尾に笛をつけて空高く飛ばすと寒空に一種のリズムを起して朗らかなる音を發する。長い冬籠の沈黙と無聊に苦んだ都人の生活に一脈の動的階調を與へる。何時の頃から始まつたか知らないが如何にも支那人らしい風流である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 大道床屋テートリジエ——剃頭節——（北京所見）

簡易な職業具の一切を一竿に托して大きな共鳴機の
びいん／＼と長閑な音を街頭の雑音に縫わせて、客あ
らば路上の何處でもが彼等の仕事場となる。
なごやかな陽を一杯に浴び、剃るものも剃られるもの
も街上の喧噪には無關心の裕暢さである。

（印畫の複製を嚴禁す）



● 義和團犠牲者の碑 (北京)

彈痕蜂高の檜樹を背景にしたこの一小碑に對すれば、夢は複雑に煙る。西太后嬌慢の一代は淫蕩に輝き、佞奸は氣味悪くも微笑んで、清朝末路の秘史は怪くも波瀾に富む。扶清滅洋を叫んで立つた義和團匪も、廟議の操縦によつて、當時澎湃してゐた排外運動の露骨な表現となつて、首に賞金をかけられた各國居留民は、この凶暴の重圍に公使館を根城に奮戦したものであつた。其時勇敢な奮死を遂げた官補小島正二郎氏の魂は永遠に人類的な犠牲を偲ばして日本公使館内に瞑つてゐる。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 煤球兒マイチヨール || 練炭 || (北京にて)

自然に恵まれてゐない大陸に住する者には燃料は切實に生活に影響する。草原の蒙古人は牛糞に可燃性を發見し、北京一帶の人士は粘土の潜熱を巧に利用した。累々と日を吸ふて山と積まれたものは粉炭と粘土を練り合はした煤球兒である。無價値な粘土を平凡に効利化し簡素な手工で割に多量を生産してゆくところに支那人特有の大まかな科學味の面白さがある。

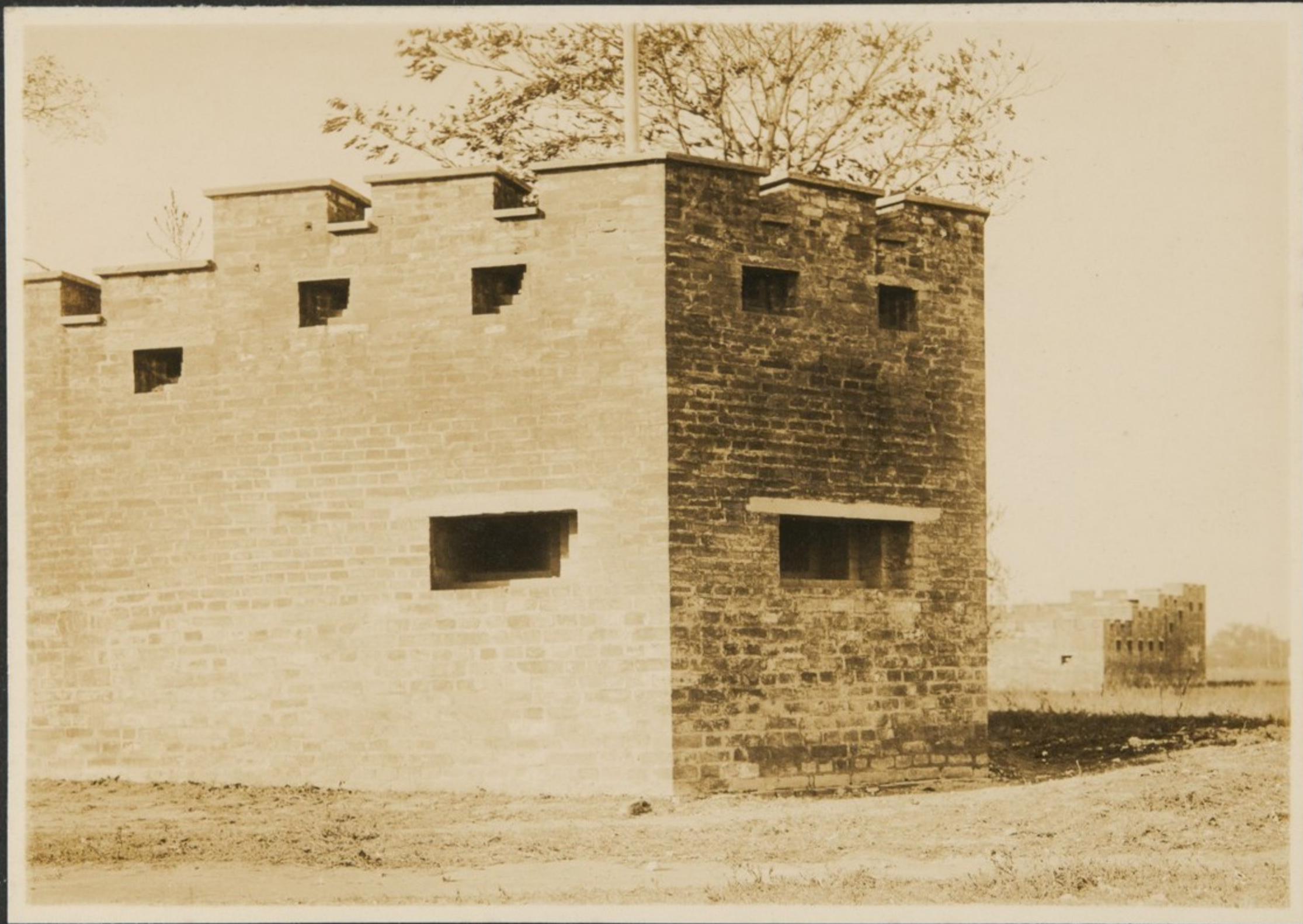
(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 元の土城趾 (北京郊外)

華かな世界統一の幻影に魅せられた元の忽必烈は、先づ武威四邊を壓して燕京に築城した。然し蒙古人特有の力のみの信仰は、文化燦然と輝く中原に立つとき脆くも眩惑して、只一個の暴力の偶像にしか過ぎなかつた。風物蕭條の中、危く支ふるラマ塔の崩れ、蜓々たる土城の廢墟は、元の滅亡を語つて、北京郊外秋轉た淋しきものがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 公使館區域 (北京)

内より見せ、外より見せた城壁はかなりに物々しく堅牢なものである。各國公使館が群居して居る周圍を繞つてゐるものとしては、餘りに時代意識に無關心な闇い暗示の影を引くものではなからうか。

北清事變後將來の慘禍を名として構へた支那國權の毫も及ばない治外法權の絶對不可侵地である。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 北

海

(北京)

水千姿万態の繊細な動きは、例へ北京人士の飲料水の万一の變に備へるさいふ實用から貯へられたものであつても點景の情趣を忘れられるものではなかつた。玉泉より引いた水は紫禁城内を冒し、禁苑一の絶唱たる北海を湛めて、街は森にかくれて森から續き、遠く霞む樓閣殿宇さては怪奇なラマの白塔を浮べて優雅な古典の、森の都、繪の北京に、一つの潤ひを漂はして居る。

(印畫の複製を嚴禁す)



◎ 紫 禁 城 (一) (北 京)

山河千里國
不觀皇居壯

城闕九重門
安知天子尊

馱 賓 王

史乘三千歲、易姓革命の支那には清朝帝京の豪奢も
今は空しい夢となつた。民衆の力の根強さを知らざる
オベツカ詩人は限りある一人の力をのみ信じて皇居の
壯と天子の尊を歌つた。行人徒らに昨日の夢を悲んで
今日風に慄へる庶の如き民の痴苦を思ふものなきは支
那の現狀である。
(印畫の複製を嚴禁す)



● 紫 禁 城 (二) (北京)

秋の斜陽に照された黄色の裳は、宮城の全構圖を夢のやうに浮び出して居る。景山の上に立つた三脚子は、その雄大なる規模に稍々ホースの中心を決めるのに迷へなきを得なかつた。

中にも魏々として聳ゆる大和殿の壯麗偉観は、當年西太后が外臣と接見した虚禮の豪奢な夢を偲ばしむるに足るものがある。

(印畫の複製を嚴禁す)



● 天壇祈年殿 (北京)

大理石の廻欄に碧琉璃瓦のドームは如何にも天壇の名にふさわしい形象の建築である。祈年祭は年の初めに當りて天子自ら億兆の幸福と五穀の豊穰を祈るもので、帝政の頃は年々此の殿堂に於て嚴かに行はれたものである。その華麗なる附彩と精巧なる彫刻は北京の建築藝術の中でも有数のものである、殊に前面階段の處に彫りつけられた龍の紋様は偉大なる傑作である。

(印畫の複製を嚴禁す)

大正十三年八月

第一回

大正十四年拾貳月

第十七回迄



百七拾枚寫真

